

まちづくり提案2024 感想

中村祐司（指導教員）

気がつけば、今年度で20回目の連続参加になるのだろうか。まちづくり提案は研究室での恒例行事としてしっかり定着した。しかし、だからといってマンネリ感の欠片もないのは、当然ながら参加学生が毎回異なるからである。「組織は人」といわれるが、ゼミもある種の緩やかな組織であり、研究室メンバーの個性は毎回異なるし、教員の指導の仕方も毎回異なったものになる。また、発表に至る手続き的な環境も年度によって微妙に変わってくる。

その意味で、今回は参加メンバーにとっても教員にとっても特別な感慨を得た機会となったのは間違いない。

というのは、参加にあたっていくつかの試練に直面したからである。参加学生数が条件ぎりぎりの2名であったこと、怪我や体調の面で、教員も含めメンバーの誰かが活動困難な時期が代わる代わるやってきたこと、発表会当日が教員の授業日が重なってしまったこと、などなどである。

しかし、まさに「三人寄れば文殊の知恵」、そして院生など他の研究室メンバーの支えで、テーマ設定、参加申請、中間報告、提案論文、ポスター作成、パワポ資料、プレゼン本番、それに続くポスター説明など、最少人数で最後までやり切ったのである。

内輪の事情ではあるものの、二人にとっては所属学部の地域プロジェクト演習の活動も同時並行で進めなければならず、スケジュール的にも非常に厳しかったはずである。それでもとにかく前を向き、「素手」でもって正面から東部総合公園のこれからの事業について、「手作り」の提案作成を積み重ねた。そのこと自体、大いに誇っていいし、将来的にいろいろな課題に向き合う中で、解を探る上で不可欠な「ソフト財産」あるいは「知恵のツール」を身に付けたことは間違いない。

いくら行政のプロとはいえ、宇都宮市がこうした環境を粘り強く用意してくれたからこそその得難い経験である。他の参加研究室のメンバーなども含め、関係者に感謝申し上げたい。

宇都宮大学行政学研究室

山口菜々

テーマや方針については、先生や先輩方がたくさんアドバイスをくださり、決めることができた。はじめは東部総合公園についての見識が浅く、中間発表にて市役所の方々に丁寧にご説明いただき、さらには、時間を設けていただいて市役所にお伺いし、いろいろとお話を聞くことができた。そこで得た情報やヒントをもとに、2人で力を合わせて提案を完成させることができて良かった。

本番では、入学式ぶりに着るスーツ、何よりヒールのある靴できちんとした身のこなしができるかが不安であった。自分たちの発表では、最初スライドの操作が上手いかなかったり、少し囁んでしまったりと、多少のトラブルはあったが、精一杯発表することができたと思う。2番手だったため、その後は発表を聞くことに専念することができ、他の団体の緻密

な提案に圧倒された。午後のポスターセッションは、興味を持ってくださった方や、ご協力くださったNCC推進課の方々にも来ていただき、賞賛の言葉もいただき嬉しかった。

2人だけでまちづくり提案を行うのは不安であったが、周りの方々のお力添えもあって無事に終わることができ、良い経験となった。

木村旭陽

まちづくり提案を終えて、まずは発表を無事終わることができたという安心感でいっぱい。また、LRTを題材にしたこともあって、ポスターセッションではたくさんの方とお話することができて非常にうれしく思う。そして、発表会を通して特に感じたのは、宇都宮市民のまちづくりにかける思いの熱さである。ポスターセッションでは、様々な立場の人と意見を交わすことができ、その熱さを直接肌で感じるすることができた。参加している学生たちももちろんであるが、一般参加で来ている方たちの熱さもすごかった。その熱さに負けなようにと、自分にできる精一杯の説明をして、満足そうに戻っていく方たちが印象的だった。今までは良かった点を述べてきたが、反省すべき点もあった。それは、私たちの見通しの甘さである。前期から進めてきたことではあったが、期限のぎりぎりの提出になってしまったなど、ゆとりを持たせることができなかつた点を反省している。また、入院していたこともあり、満足に歩くことができなかつたことから、山口さんに調査を任せきりにしてしまった部分もあり、とても感謝している。

こういった、様々な思いを感じることができたまちづくり提案であるが、非常に自身のためになった良い経験になった。まちづくりに熱い思いを持つ人たちと意見を交わしたという経験は、今後私にとって良い武器になるのではないかと感じる。